

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770180

研究課題名(和文) 英語の名詞句構造の共時的・通時的研究

研究課題名(英文) A Synchronic and Diachronic Study of the Structure of Noun Phrases

研究代表者

茨木 正志郎 (IBARAKI, Seishirou)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30647045

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：英語史における定冠詞の発達と出現と名詞後位属格の消失について調査・分析を行った。定冠詞は指示詞から発達し、その出現時期は12世紀後半ぐらいからで定冠詞としての地位を確立したのは14世紀頃であることを明らかにした。定冠詞は水平化により特定の形態が頻繁に使われるようになり、意味の漂白化が起こった。また、定冠詞の出現が名詞後位属格の消失に影響を与えていることを提案した。さらに、古英語に多く観察された名詞後位修飾の形容詞の分布変化についても説明を試みた。

研究成果の概要(英文)：This study has investigated the development of the definite article and the loss of postnominal genitives in the history of English. It has been proposed that the definite article started to emerge at the end of the twelfth century and completed during the fourteenth century, and this development had a influence on the loss of postnominal genitives. This study also attempts to give an account of the distributional changes of adnominal adjectives in the history of English.

研究分野：英語学

キーワード：定冠詞 指示詞 属格名詞句 文法化

1. 研究開始当初の背景

英語の名詞句構造の変遷と名詞句内修飾要素の歴史的分布・発達にはいまだ明らかにされていない領域が多く、先行研究の多くが限られたデータに依拠しており、理論のみが先行する傾向にある。このような状況にあって、史的コーパスを利用して徹底的な調査を行い、その調査結果に基づいた分析が必要であると考えに至った。また、現代英語の名詞句構造の分析においても、その証拠と論拠において決定的な先行研究は存在しておらず、通時的観点に分析の手掛かりを求めていくことが有効な手段であると考えた。

これまでの自分の研究において、名詞句内修飾要素の D 主要部への文法化という観点から、所有代名詞と属格名詞句の発達について研究を行ってきた。そこで、これまでの研究成果を活かして、英語史における定冠詞の出現・発達と古英語・中英語における名詞後位修飾の属格名詞句と形容詞にもアプローチが可能ではないかと考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

定冠詞 the は、古英語の指示詞 se より発達したというのが一般に共通した見解であるが、その出現時期と確立時期、古英語指示詞 se の名詞句構造上における位置、指示詞から定冠詞への発達過程について明らかにされていない。これらを明らかにするために、史的コーパスを用いた調査を行い、得られたデータより浮かび上がった事実の説明を与える。

また、現代以前の英語における名詞後位修飾要素である属格名詞句と形容詞について、それらの分布の歴史的変遷と構造分析を試みる。現代英語と比べて、自由に名詞後位に現れていた属格名詞句と形容詞が名詞前位に現れるようになった要因を文法化の観点から考察する。

3. 研究の方法

これまでの準備的な調査を継続し、4 つの史的コーパス York-Toront-Helsinki Parsed Corpus of Old English (YCOE) (古英語) と The Second Edition of the Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English (PPCME2) (中英語)、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PCEME) (初期近代英語)、The Corpus of Late Modern English Texts (CLMET) (後期近代英語) と現代英語のコーパス The Collins Wordbanks Online (Collins X 現代英語) を使って調査を行い、定冠詞と名詞後位の属格名詞と形容詞の歴史的変遷を明らかにする。次に、調査から明らかになった事実に対して、極小主義に基づく言語理論を用いた原理的説明に着手する。その際、自分がこれまでに行ってきた、所有代名詞と属格名詞句の

発達に照らして、文法化の観点から説明を試みる。

4. 研究成果

英語の定冠詞 the の発達に関して、その出現時期と確立時期、古英語の指示詞 se の名詞句構造上の位置、指示詞 se(that) から定冠詞 the への発達過程、の 3 つの問題を明らかにした。について、Wood (2003) などの先行研究が調査・分析を行っているが、利用されているコーパスが収録語彙の小さなもので十分な事実調査がなされていない。その結果、定冠詞の the の出現について分析を試みているが、最終的な結論が出せずにいる。そこで、Wood (2003) の不足している調査を補う形で、YCOE、PPCME2、PCEME の 3 つの史的コーパスに基づいた徹底的な言語事実の調査を実施し、指示詞から定冠詞への発達が始まった時期は 12 世紀後半で、発達が完了したのは 14 世紀中であることを明らかにした。

について、先行研究の間では古英語指示詞の統語位置は DP 指定部とする意見と主要部とする意見で分かれている。仮に、DP 指定部であるとする、D 主要部である定冠詞への発達の過渡期に、DP 指定部と D 主要部の両方の位置を占める事例が観察されることが予想される。これは Gelderen (2004) が提示している CP 指定部であった補文標識が C 主要部へ変化する過渡期に、それら両方の位置を占める事例があることから予想される。しかしながら、コーパス調査より、指示詞と定冠詞が共起する事例は一例も得られなかった。この調査結果に基づき、本研究では、指示詞は古英語より主要部要素であったと結論付けた。

について、指示詞から定冠詞への発達は文法化の事例で、文法化の起こる原因は素性の消失という意味の漂白化によるものであると主張した。指示詞は解釈不可能な ϕ 素性と直示素性を失うが、このような変化が起こる要因として、水平化による形式の統一と頻度の増加が挙げられる。つまり、古英語指示詞は数・性によって形態を変化させていたが、水平化が始まると全て *þe* という形式に統一される。その結果、一致関係が起こっているかどうか曖昧になり、意味の漂白化を引き起こした。また、形式が一つに集約されることで、使用頻度が爆発的に増えることとなり、意味の漂白化を促進する要因となった。

指示詞 that が定冠詞 the へ発達した事実はよく知られているが、言語理論に基づく説明は十分に行われてこなかった。本研究ではこの変化に対して文法化の視点から分析を試みた。

英語史における名詞後位の属格の消失について、自分の名詞前位の属格名詞の発達と定冠詞の発達の観点より説明を試みた。まず、YCOE と PPCME2 を用いて古英語と中英語における名詞前位と名詞後位の属格の分布を

調査し、古英語より名詞前位の方が優位であり、中英語には名詞後位の属格が消失していることを明らかにした。具体的には、古英語初期の9世紀頃は約28パーセントの属格が名詞後位に現れていたが、古英語後期の12世紀前半には約10パーセントまで割合が減少する。そして、中英語には一例も存在しないことが分かった。

次に、コーパス調査より名詞後位属格の消失の時期が明らかになったので、自分のこれまで行ってきた属格の発達の研究成果に基づいた原理的説明を与えた。具体的には、Abney (1987)のDP仮説を採用しChomsky (2000)以降の一致システムに基づいて分析を行った。古英語の名詞句はNP補部にDPを選択する二重DPであると仮定し、低いN主要部が低いD主要部を介して高いN主要部へと繰り上がって、高いD主要部に位置する指示詞と一致していた。このような構造において、名詞後位の属格は低いNP指定部に基底生成していたが、中英語にはいると属格接辞の-sがD主要部へと文法化し(Ibaraki (2010))、低いD主要部が主要部移動によって利用不可能になってしまう。また、中英語には指示詞から定冠詞への文法化も起こった。定冠詞は探査子となる解釈不可能な φ 素性を失っているが、接語的な機能を獲得し、すぐ後ろに名詞を選択しなければならない。このような定冠詞の性質のため、中英語においても二重DP構造では低いN主要部要素は高いN主要部位置へと繰り上がって定冠詞を支える必要があった。しかし、属格の発達により、低いD主要部が-sによって占められているので、このような主要部移動が妨げられるようになり、その結果、二重DP構造での派生が破綻するようになり名詞後位の属格は消失したと主張した。

最後に、古英語の名詞後位の形容詞に関して調査・分析を試みた。主な先行研究にFischer (2000)とHaumann (2010)があるが、どちらの分析にも理論的経験的問題があることを指摘した。Fischer (2000)は形容詞の強弱屈折と意味を関連付けて分析を行っているが、そのような区別が難しい事例が存在することを指摘した。Haumann (2010)はLarson (1998)における等距離の概念を使って説明を試みているが、Haumannの分析は等距離の概念と相容れないものであることを指摘した。代案として、分離DP構造とR(elator)P構造を採用し、形容詞はRP内で名詞と主述関係を持つ場合にのみ叙述の解釈を持ち、dPに現れる場合には限定の解釈を持つと主張した。古英語では叙述の解釈を得た形容詞はRP内に留まっていたが、屈折の水平化により名詞との修飾関係が形態的に表されなくなったため、名詞前位に繰り上がらなければならなくなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

1. 茨木正志郎「名詞修飾形容詞の歴史的変遷について」『JELS 33』24-30. 日本英語学会 (2016) (査読有り)

2. 茨木正志郎「英語史におけるD-Systemの発達について—文法化の観点から—」『日本英文学会第87回大会 Proceedings』78-79. 日本英文学会 (2015)

3. 茨木正志郎「二重属格の構造について」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編 66』79-90. 北海道教育大学 (2015)

4. 茨木正志郎「素性の経済性による定冠詞theの文法化の研究」『日本英文学会第86回大会 Proceedings』23-24. 日本英文学会 (2014) 査読有り

5. 茨木正志郎「定冠詞の文法化について」『IVY 47』1-19. 名古屋大学英文学会 (2014) (査読有り)

6. 茨木正志郎「英語の定冠詞の発達について」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編 64』123-134. 北海道教育大学 (2013)

7. 茨木正志郎「英語史における名詞後位要素の消失について」『言語変化—動機とメカニズム—』2-15. 開拓社 (2013)

〔学会発表〕(計5件)

1. 茨木正志郎「名詞修飾形容詞の歴史的変遷について」日本英語学会第33回大会 (2015年11月22日: 関西外国語大学) 大阪府枚方市

2. 茨木正志郎「英語史におけるD-Systemの発達について—文法化の観点から—」日本英文学会第87回大会シンポジウム (2015年5月23日: 立正大学) 東京都品川区

3. 茨木正志郎「言語変化における素性の経済性の妥当性」史的英語学研究会第1回大会 (2014年8月11日: 藤田衛生保健大学) 愛知県豊明市

4. 茨木正志郎「素性の経済性による定冠詞theの文法化の分析」日本英文学会第86回大会 (2014年5月24日: 北海道大学) 北海道札幌市

5. 茨木正志郎「素性の経済性による文法化研究—定冠詞theの発達を中心に—」北海道理論言語学研究会第6回大会 (2014年3月8日: 旭川医科大学) 北海道旭川市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

茨木正志郎 (IBARAKI, Seishirou)

北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：30647045